Lesson 69

生涯にわたって社会のいたるところで学ぶための方法序説

発想する！授業

コミュニティ学習を！

松田 道雄

提案：コミュニティを学ぶ大人の講座の内容と方法と評価を創意工夫しましょう。

前号では、「大人の講座」の実践について報告しました。それら、各地の社会教育行政が主催する多くの「大人の講座」の学習主題の中心は、住民による地域のコミュニティ（人間関係によるつながりの集合）の再生と活性化です。

そこで、本号では、「コミュニティとは根本的にどのようなことなのか？」「どのようにすればそれを学ぶことができるのか？」「その学習をどのように評価すればいいのか？」について、今年度、杉並区社会教育センターで行なわれている講座、すぎなみ大人塾昼コース「だがしや楽校的社会の作り方」の現時点（12月末現在）までの実践と、今年度終了した世田谷区民講座「人間とデザイン」を通して、話題提起したいと思います（「だがしや楽校的社会」とは奇妙な表現ですが、これは、コミュニティ原理による社会と言い換えてもいいでしょう）。

現在、コミュニティが大人の社会教育・生涯学習の大きな主題になっているのは、団塊世代を山に、元気な退職者と子育てを終えた主婦が増大しているからです。その方々がどのような行動をとるかは、日本社会、地域社会に大きな影響を与えます。各地の自治体は、その方々が地域社会を支えるコミュニティづくりを担ってくれることを願って、それを社会教育行政に託しているのだと思います。

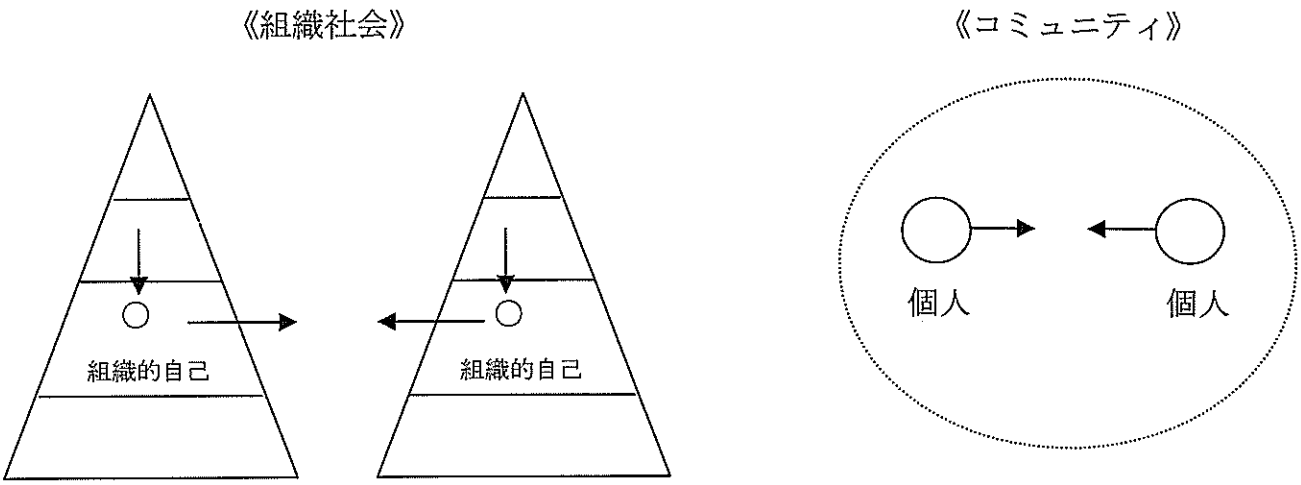
まず、コミュニティの基本原理を考え深めることから始めましょう。平たく言えば、コミュニティは、組織社会と比較することができます。

組織社会では、人は階層の中のどこかに位置づけられて、その役割の名刺を持って他者と関わり、名刺の役割を果たすことで給料をもらいます。そこでは、思考も行動もすべて、組織のための役割を遂行する様式（モード）になります。組織社会における「私」は、組織的自己とでも呼ぶことができます。

これに対して、コミュニティの基本的な様式（モード）は、「私」個人と相手個人の出会いと関係づくりによって生成し、名刺がないつき合いです（図1）。もちろん、組織社会でも、コミュニティの様相が出てくるつき合いはありますが。

この了解から見ていくと、いかに昼の時間帯の社会教育・生涯学習の講座が必要になるのかがわかってきます。それは、これまで名刺を持ったつき合い方（会社や役所の一員としてのふるまい方）で30年以上も過ごしてきた大人が、組織社会から退き、名刺もなく、一人の個人としてだ

図1



れかと関わるには、あらためてコミュニティ原理を体得しなければ、自分の身のふるまい方がわからないからです。

実際、どこの日中の講座でも、だまって椅子にすわって受動的に講師の話を聞いている分にはわかりませんが、いったん自由にふるまう時間があると、これまで組織社会の様式にどっぷり浸かってきた方が、どのように動いたらいいかわからず、一人ぽつねんと座っている光景を見かけることがあります。

その裏返しに、組織社会を離れて一人の個人として人と関わって共に生きていくすべ（コミュニティ参加の技法）を知らない中高年男性が、何歳になっても組織社会にしがみついていようとする姿も、周囲を見渡せばよく見かけますね。いつまでも年配者が組織社会から退こうとしないために、次世代の若者が組織社会に入ることができない（就職口がない）という状況は、人間社会の維持成長の視点から見れば、新陳代謝が滞ってしまうので大変危機的な状態になります。

高齢の大人を組織社会からコミュニティ社会へスムーズに移行させ、若者を組織社会に取り入れ、社会全体が組織社会とコミュニティ社会の相補完関係による循環システムとして機能するようにし、だれもが生涯にわたってどちらの社会ででも生きがいを生み出していくことができるようにすることが、高齢社会の要点でしょう。

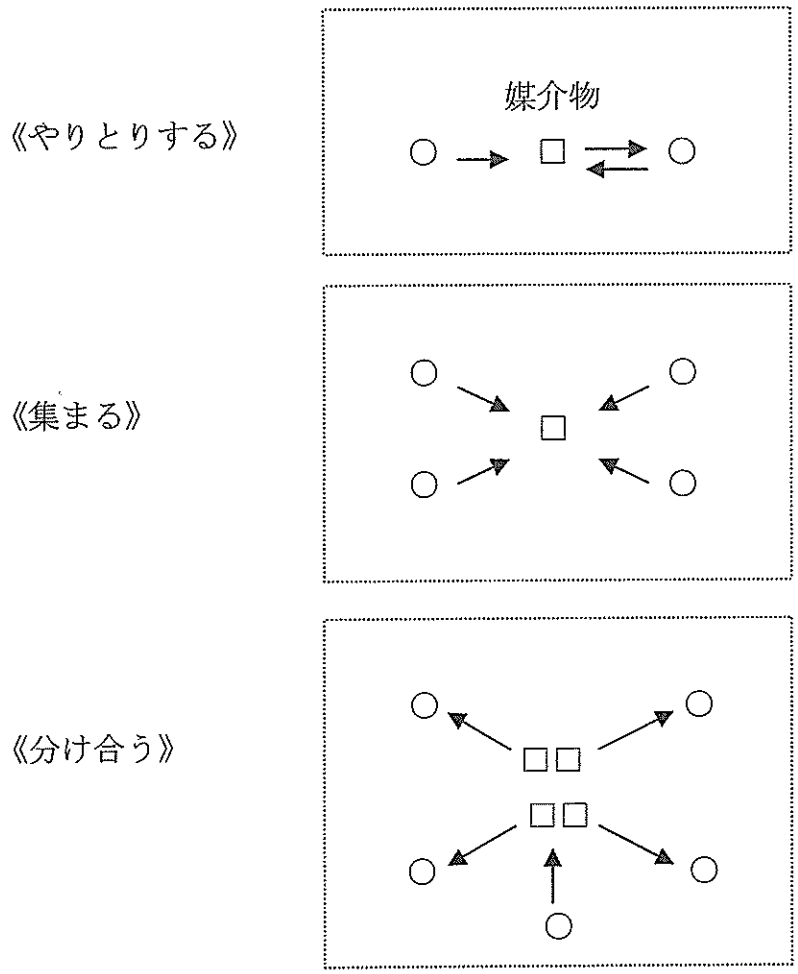
私自身も、組織社会（学校教員）の一員でありながら、並行して地域社会に出て、だがしや楽校などの活動をいろいろしているのも、コミュニティ社会でのふるまい方・生き方を身につけられるようにしたいという人間の生き方としての思いがあるからです。

高齢人口が多くなる社会は、長い人類史の中で初めての経験になります。歴史的に見ても、児童・生徒の学校教育が、組織社会に入る前に組織社会の様式を身につける場であるとすれば、組織社会を退職した元気な大人が、次に、組織社会と異なるコミュニティ社会の様式を身につけることを学ぶのは、「学び直し」というより、「新たな学び」と言ったほうが新鮮です。まさに高齢社会ならではの新たな教育の誕生とも言えるでしょう。

では、その新たな教育の核心、つまり、コミュニティ原理の核心とは、どのようなことだとみなさんはとらえますか？コミュニティ教育については、今後大いに現場の担当者のみなさんが実践研究会などを開いて探求されていくことでしょうが、まず「隗より始めよ」で、私から3つの基本的な関係要素を提起したいと思います。

それは、「やりとりする」、

図2



「集まる」、「分け合う」という関係性です（図2）。「やりとりする」というのは、語る―聞く、与える―受け取る、教える―教わる、など相互に活動が交換される関係性を総合します。そして、これらいずれの関係性をも生み出すきっかけになっているのが、何らかの媒介物による活動です。その多彩な媒介物は、組織社会における名刺と対比されるようなものとも言えます（多様な人間活動を生み出す豊かな関係性については、『関係性はもう一つの世界をつくり出す』に体系的にまとめてみました）。

人は、何もない状態で人と関係を結ぶことはなかなかできづらいことです。それをより円滑に行なう経験を日常しているのは、組織社会に勤めている大人（男性）ではなく、組織社会に勤めていない女性や主婦の方々などでしょう。

普段、名刺を持たずに、個人と個人のつき合いを生み出している女性のやり方は、お茶や手料理、手芸など、何か具体的な媒介物を介して、人とつながったり、ちょっとしたお互いの技や知恵やモノなどを贈与し合うことで、助け合う人間関係づくり、つまりコミュニティの関係性を育んでいるように見えます。

それを体験学習する実験として、すぎなみ大人塾や世田谷区民講座など、私が今年度参加した大人の講座では、先のコミュニティの関係要素（図2）が受講者間に自然に生まれることを願いながら、講座に「モノ」（人間関係づくりを促進する媒介物）を持ち込むことを奨励し、私自身も持ち込みました。その結果、いつも何かかにかモノにあふれた講座の中で、どのような関係性が醸成されたと思われるか、講座風景の写真から類推してみましょう。

今年度のすぎなみ大人塾昼コースは、丸く（四角く）囲んで自己紹介をする形態から始まりました（写真1）。

写真2は、大手家電企業で

写真1　セシオン杉並、6月13日

写真3　同

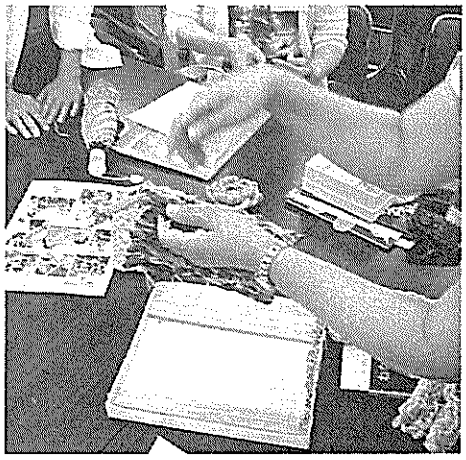
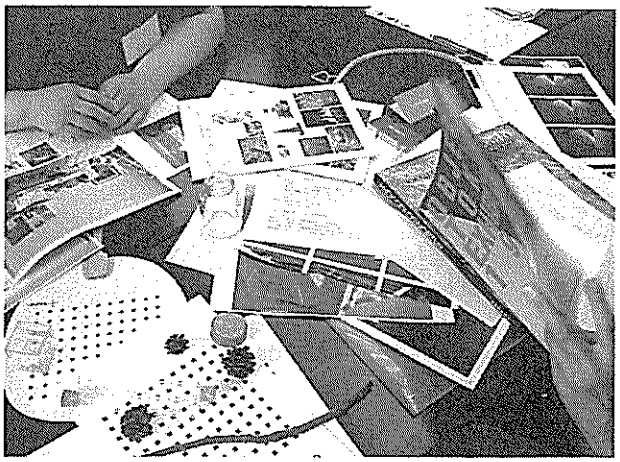


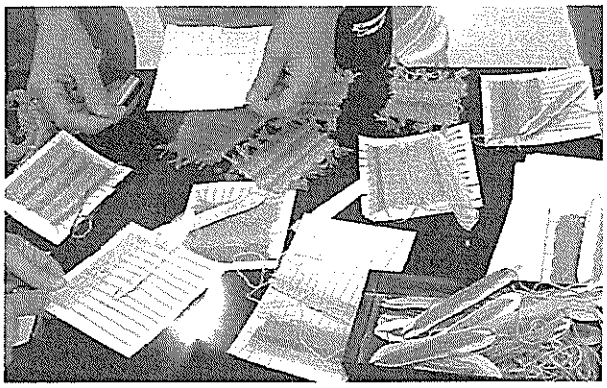
写真2　セシオン杉並、7月11日



商品のデザインを手がけてこられた受講者（男性）が、デザイン雑誌や自然物や雑貨屋づくりをイメージしたプレゼン資料などを机にどっと散りばめたところです。ここから、アイデアの出し合いのやりとりがどんどんわきおこりました。具体物が豊かなアイデアを触発させた場面でした。

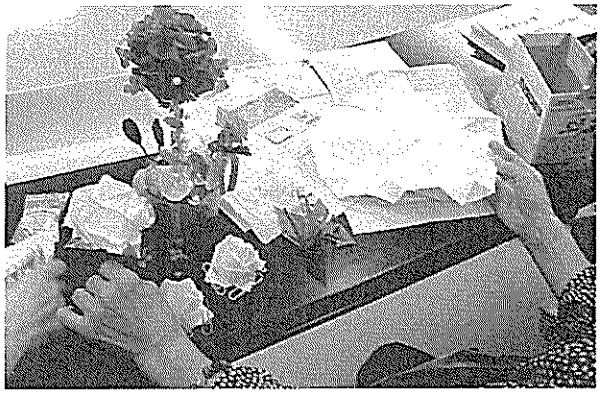
写真3と写真4は、私が山形のニット工場の残り糸を、杉並区と世田谷区の双方の講座に持ち込んだところ、奇しくもどちらも次回に、その糸を持って帰られた受講の方々が、それぞれの方法で糸を織ってコースターをつくる手軽な道具を作って持参され、周囲の人たちに教えるやりとりが生まれた場面です。

写真4　太子堂区民センター、7月25日



モノは、素材であればそれで何かを作るための道具を生み出し、道具ができれば道具の使い方を教えるやりとりが生まれ、見事な作品であれば、その作り方を教わるやりとりが生まれます。写真5は、紙で作ったバラの作り方を教えているやりとり場面です。

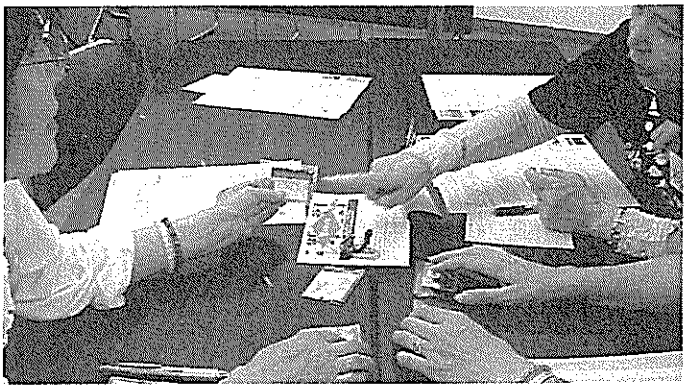
写真5　太子堂区民センター、9月27日



次に、モノは人を引き寄せ集めて、人間集団の凝集性を高める役割もはたします。小さな小物でも人の視線を集めることができますし（写真6）、「紙ナプキンでこんなものも作れるの！」と驚くような創作を見せてくれれば、人が集まってきます（写真7）。ずらっ

写真7　セシオン杉並、9月12日

写真6　セシオン杉並、6月27日



とテーブルにみなの作品を並べれば、仮設の市民ギャラリーのようになって、人が集まり会話がはずみます（写真8）。みんなで一つのモノを作る共同制作では、参加者の労力とコミュニケーションがそのモノづくりの過程に蓄積されます。写真9は、夏の阿佐ヶ谷七夕祭りに出展した張りぼての制作途中風景です。

人がたくさんいれば、みなの知財を集めた共同活動によって集合的学習をつくり出すこともできます。写真10は、12月のすぎなみ大人塾昼コースでもちつきをした日、学習支援補助者の谷原博子さんが中心になって受講者一同で作成した「全国わが家のお雑煮自慢マップ」です。人生経験豊かな大人が集まる学習では、支援次第でこのような集合知財をいくらでもつくり出すことができるでしょう。

次に、受講者どうしが人間関係を親しく紡いで、コミュニティ感覚を育成する重要な決め手が、分け合う行為です。グループ学習の最中に何気なくおすそ分けするモノが出されたり（写真11）、地図づくりをしている活動の中でリンゴがむかれたり（写真12）、手づくりジンジャエール（写真13）や手づくりハーブオイ

写真8　セシオン杉並、10月26日

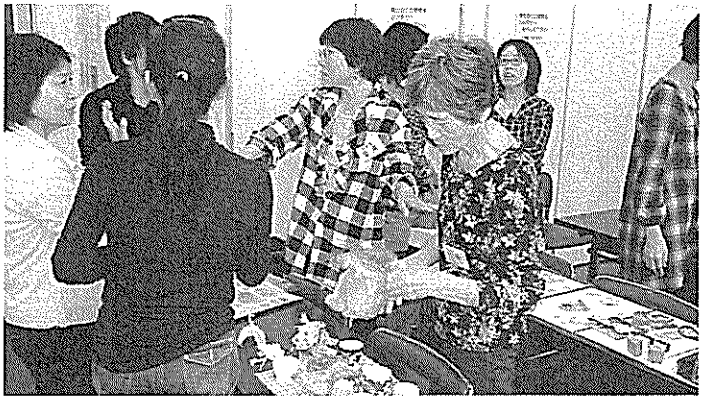


写真9　セシオン杉並、7月25日

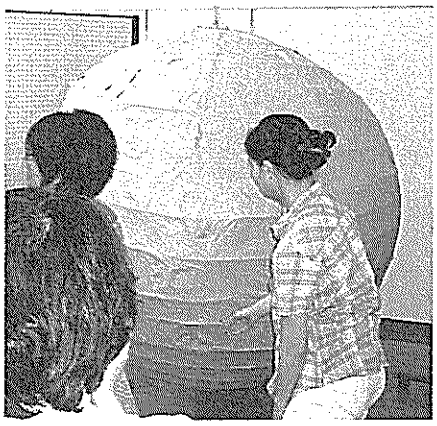


写真10　セシオン杉並、12月20日

写真11　セシオン杉並、9月27日

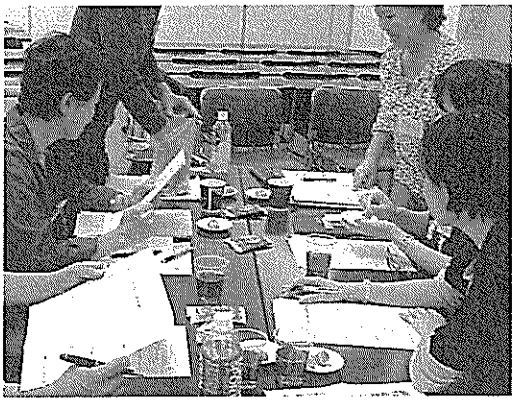


写真12　セシオン杉並、11月21日

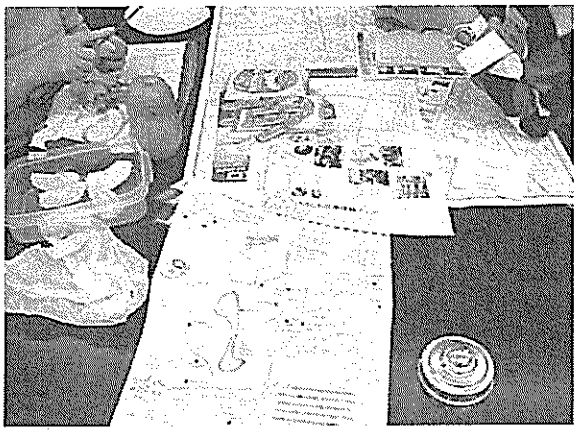
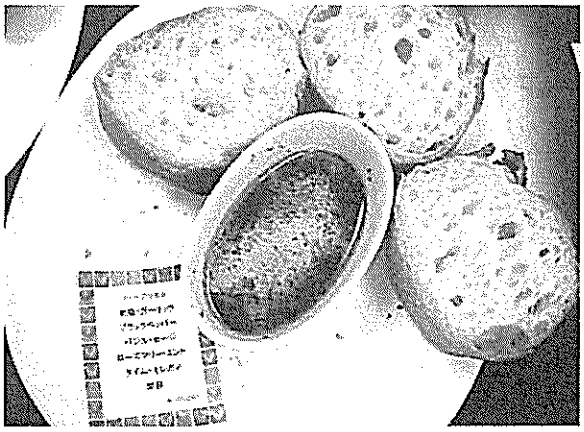


写真13　セシオン杉並、9月12日

ル（写真14）など、家庭の主婦ならではのおすそ分けの光景もちらりと見られました。手づくりの折り紙をたくさん作ってみなさんにおすそ分けされた方もいました（写真15）。この方は、ご自身が作った折り紙をスクラップブックに整理されていました。

他者に与えること（贈与）は、経済や教育や福祉など、すべての人間活動の営みの根源的な行為です。それは過剰過ぎても人間集団や人間関係に負の荷重がかかりますが、なければ人間集団も人間関係も生成しません。逆に言えば、分かち合いの機知（微妙な感覚）を体験学習によって身につけることは、人間活動の最も重要な社会的学習内容であるとも言えます。

写真14　太子堂区民センター、9月12日



ここに報告している講座は、決して料理教室でも手芸教室でもありません。講座を演出しているさまざまなモノは、あくまでコミュニティを生成するための媒介物（教材）として用いられています。

組織社会の作法を身につけるための学校教育では、このような雑多なモノや分け合い行動は、組織の目的活動のじゃまになるモノ（駄なモノ）として禁止されます。組織社会に生きている男性の思考からすると、飲食、おしゃべり、雑談、手芸、おすそ分けなどは、まことにたわいのない余計なモノとしてしか映らないかもしれません。

写真15　セシオン杉並、9月12日

しかし、そこにこそコミュニティの本質があることは、理性的な目であらためて見れば気づくでしょう。コミュニティの本質とは、非目的性であり（人生がそうであるように）、あらゆることがらを含んだ生活の総体なのです。個々人の現実的な生活に応答する人間関係のつながり基盤（すなわちコミュニティ）が成立することで、自治体が期待する、地域生活のさまざまな場面で住民どうしが助け合い、住民による生活課題の解決などの主体的行動が生じ易くなるのでしょう。

これまで、とかく、組織社会の男性的な思考でコミュニティを育む学習講座を行なうと、コミュニティの滋養となっている要素をすべて消去した無機質な内容と方法になっていたので、実質的な成果がなかなか生まれないということが多々あったのではないでしょうか（全国の商店街の活性化が、男性よりも女性によるほうが成功しているという話にも通じる感じです）。

コミュニティづくりの学習は、その内容と方法とともに、どのように学習を評価していくかについても、コミュニティの特質と学習方法の特質を反映したものが望ましいでしょう。PDCAサイクルで言えば、評価（C）は、また次の学習活動（A）に生かすものでなければなりません。今回の事例報告では、講座場面の写真を評価材料にしてみましたが、受講者の文章（作文）

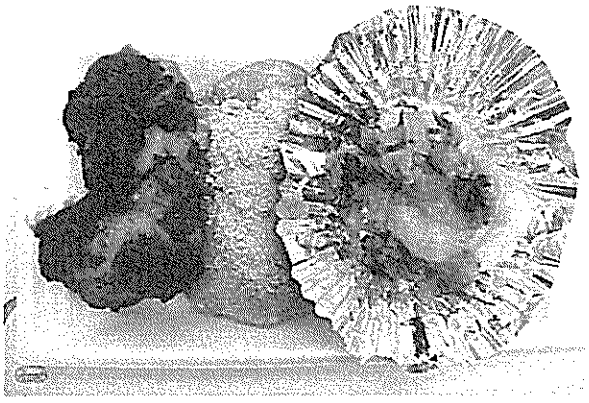
などから質的評価を考察するなど、多様な学習評価の切り口と方法の検討も今後期待されます（受講者の作文による質的評価資料として、すぎなみ大人塾だがしや楽校編集委員会編『縁育ての楽校』をまとめました）。

今年度のすぎなみ大人塾昼コースの講座風景の写真から、コミュニティ生成の経過を物語る一枚を紹介します（**写真16**）。この場面は、講座2回目の終了直後の様子です。講座ではグループ学習を行ない、お互いにどのような関心を持っている人なのか興味津々の雰囲気でした。講座後も余韻の中で相互に語り合って関係をつくろうとする様子がよくわかります。この写真には、いくつの相互関係の集合が見られるでしょうか。

随分長く、コミュニティ学習の講座を写真分析から提起してきましたが、12月の講座では、先に紹介したようにもちつきをしました。**写真17**は、その時いただいたもちです。ここまで写真からの読み取りにおつき合いいただいたみなさんなら、このもちができるまでに、講座でどのようなコミュニティを育む人間関係が営まれたのか、いろいろ想像することができるのではないでしょうか？

写真16　セシオン杉並、6月27日

写真17　セシオン杉並、12月20日



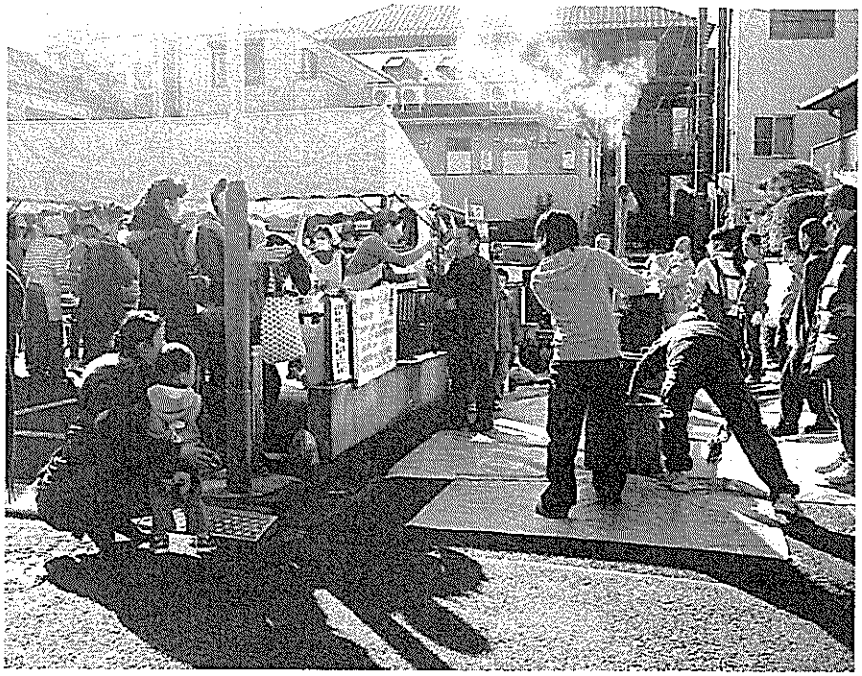
実際には、発起人（男性）と有志の方々で準備計画を立てられ、当日の講座では、男性の方々が外でもちをつき、女性の方々が調理室で3つの味に仕上げてくださり、当日参加の方々も含めて、小さなお子さんとお母さんから中高年の方々まで、みなで楽しく、一足先のお正月を楽しむように、もちのようにくっついたコミュニティ体験を味わうことができました。

この時、もちをいただきながら一人一人が語り合った中で、**写真2**で紹介した男性の方が、「日頃、頭でばかり考えがちになっていたので、今日のもちつきは、あらためて実際に体験することの意義を感じました」と話されました。コミュニティの学習方法の基本は、座学で考え議論することではなく、年齢を問わず共同活動を体験することではないかと思います。

こうして、6月から月2回のペースで行なってきたすぎなみ大人塾昼コースでは、受講者どうしのコミュニティづくりの体験学習によって、いろいろなモノを媒介にしながらゆるやかに成果を蓄積しているように感じられます。

しかし、これは部屋の中での受講者内の関係性づくりの学習であり、まだ、地域社会に出て一般の地域住民の方と関わる体験活動は行なわれておりません。社会教育行政がめざすことは、講座後にそのような地域社会での主体的な活動ができるようになっても

写真18　台東区池之端にて、2009年12月



らうことです。それには、講座の中でも実体験していくほうがより効果的でしょう。

写真18は、私が一昨年前に住んでいた東京都台東区で、12月たまたま通りかかって見かけた、町会のもちつきの風景です。路地の一角で町内の老若男女が集い、和やかにもちつきをしていました。まさに、いざとなるともちのように人々がくっつき合うことができるようなコミュニティを感じました。

すぎなみ大人塾昼コースでは、今年度残りの1月・2月に、地域社会に出て活動を試みる体験もしてみようと相談しています（もちつきではなく）。この原稿をみなさんが読んでくださる時には、何かかにか外でしていることでしょう（ご関心ある方は、ぜひ、すぎなみ大人塾のHPから問い合せてください）。

コミュニティを学ぶ学習の具体的な内容は、いくらでも考えられます。それは、個々人の人生に寄り添うようにしながら、息長く継続して行なうことで、私たちの暮らしと人生と地域社会がつながっていくのだと思います。

昨年の大震災と復興への取り組みは、私たちが生きていく人間生活の基盤には組織社会とコミュニティがどちらも必要であることをあらためて気づかせてくれました。

これからの日本の高齢社会を温かくしなやかで強い社会にしていくために、ともするとこれまで組織社会の影で弱められてきたコミュニティ社会を、増加する組織社会退職者を誘いながら新たに生成していく努力を、社会教育・生涯学習行政は一層していく必要があることを切に感じています。

（まつだ・みちお）

読者の皆様へ　**連載企画への御意見・感想・提案など また質問や実践事例の紹介**

編集部まで ご連絡お待ちしています

☆提案・事例紹介：
☆提案・研修プログラム
☆提案・地域の学びの歴史
☆提案・学習プログラム紹介
☆提案・教材の工夫
☆教えて：社会教育の基礎知識
☆教えて：講師の費用は
☆教えて：いろいろな地域学
☆教えて：予算獲得法
☆教えて：補助金のしくみ
☆こんなアイデアを持っています
☆おもしろい人がいます
☆対談の組み合わせ
☆生涯学習活動をまちづくりにどう活かすか知りたい　など

〒160-0012　新宿区南元町 23番地　公立共済四谷ビル　（財）全日本社会教育連合会「社会教育」編集部内「アイデア

（まつだ　みちお　着想家、社会参画論・コミュニティワーク論・人間活動論、東北芸術工科大学教授。）
実践記録ブログ：「駄菓子屋楽校」　連絡先：dagashiyamatsuda@gmail.com